

新型コロナウイルス感染防止の

取り組みと感染状況の報告

社会福祉法人 清瀬わかば会 有働浩子

都議会に新型コロナウイルス対策についての陳情を行った（六月ニュース参照）清瀬わかば会の有働さんに、感染防止の取り組みと感染状況について報告していただきました。

感染防止のとりくみ

清瀬わかば会は、放課後デイサービス、生活介護事業、グループホーム、青年成人期の余暇活動、日中支援強化事業、人材育成事業等を運営しています。

利用者は、基礎疾患を持っている人が多く、また保護者は高齢で、一人親で、病気を抱えておられる方が多数おられます。

これらの実態から、感染を広げないために、全職員に慰労金を配り感染防止を訴え、全家庭、全職員にアンケートをとり対策をとりました。また公共交通機

関で通勤している職員にはガソリン代と駐車場代を出して可能な人は車通勤に、また感染の恐れのある利用者への対応職員を決め、看護スタッフの研修を実施。施設のゾーニングをし、備品を揃えました。

また都や市に、PCR検査や療育・入院体制の整備を要望しました。六月にグループ連絡会と一緒に「障害者が感染した場合、障害者に配慮した療育・入院体制の整備を求め」陳情書を東京都に提出しました。この陳情が趣旨採択されることが入院の困難なとき、都に訴える支えとなりました。運動は裏切らないということを実感しました。また法人の協力医である保険生協の役員と懇談し、日常の医療機関からの支援もお願いしました。

感染状況と取り組み

感染防止に全力で取り組んでいましたが、残念なことに二月一四日に感染者が出ました。

法人ではすぐにその事業所を閉所し、保健所からの濃厚接触者への行政検査と共に全職員、全利用者対象の社会的検査をしました。この社会的検査は、東京都が通所施設にも公費で実施するとなった時から清瀬市に実施の要望を出していたもので、清瀬では素早く対応実施できました。

感染者が出て五日後には行政検査を含めて一九九件の検査が終了。その結果は一八〇名が陰性で一五名が陽性、その内発熱等の症状があった方は六名（利用者四名、職員二名）で、後の九名は無症状でした。症状があった方で利用者一名が入院、三名の利用者は自宅待機、一名の職員はホテル療養、一名は自宅療養でした。自宅療養や無症状の方には家庭内感染を防ぐために感染防止のさまざまな備品を配布。家庭に帰れない二名の利

用者については、短期入所をゾーニングして、感染防止の研修を受けた職員五名で一〇日間療養支援を行いました。

事業所を閉鎖し、感染拡大をおさえてほったのもつかの間、別経路と思われる感染でグループホームから六名（利用者三名、職員二名）、また年末年始の外出、飲食での感染と思われるのですが三名（利用者二名、職員一名）感染者を出してしまいました。

大丈夫！必ず回復するから

二月三〇日、前日発熱し陽性になり、グループホームの個室で対応していた方が、夕方に三九・五℃の熱。発熱センターの電話は通じない。救急車を呼ぶ、救急車が来た時、酸素飽和度は九〇％を切っていた。それにもかかわらず入院先は決まらない。三時間後、やっと入院先が決まりほっとしている矢先、ドクターから肺炎の状態が悪い。延命処置を望みますか？という問い合わせ。母親は五〇年間にいろいろ痛い思いをさせてきたので、これ以上苦しい思いをさ

せたくない」と伝える。そのことを聞いた姉が「私が責任をもつからすべてやってもらって！」と言う。どうしようかと相談。

私も「彼女なら大丈夫！必ず回復するから」と母親を励ました。

障害者とその家族は生まれた時から病氣と闘い、生命と向かい合いながら生きてきた方が多い。五〇年も経って、またこんな辛い思いをさせてしまった。

こんなことにならないようにやってきたのにと思うと申し訳なさや悔しさで心が折れました。しかし一週間たつと看護師さんになぎらいの言葉をかけられるようになったと聞き、ほっとしました。

保健所の増設、療養・医療体制の充実を

感染拡大の総括は、各事業所ごとに総括し、全職員、保護者に配布しました。密を避けるための通所自粛を通して毎日通える施設の大切さが再確認され、それを支えている職員への感謝と、苦労に見合った待遇改善の必要性も切実な声になっていま

す。それと同時に事業所内で感染防止をがんばっても市中感染が収まらない限り感染は防げません。継続的な社会的検査、保健所の増設、療養・入院体制

**学びの場「More Time ねりま」から 連載第七回
永田三枝子：「More Time ねりま」所長(校長)**

高校や支援学校高等部を卒業した後の、知的障がい青年の教育の機会延長という視点で、二〇一九年四月に練馬区に開所した「More Time ねりま（モアねりま）」です。

今回の実践報告はいよいよ「性教育」です。ずばり、モアねりの学びの柱です。十八歳から四一歳までの学生たち全員がスキンシップや恋愛にまつわることだけでなく、自分のこと、とからだのこと、健康のこと、人とかかわり、障がいのこと、家族のことなど、それぞれ悩みを抱えています。それらは全て「人間と性」教育研究協議会（性教協）が目指している「包括的セクシュアリティ教育」そ

の整備をあきらめず求めていきます。そして何としても都立、公立病院の独立行政法人化は中止の声を上げていきたいと思えます。

のものなのです。

モアねりのプログラム内容の決め方は、学生が学びたいことと、スタッフが必要だと思うこととの両方から決めていきます。性教育は「見事に両方からのニーズです！」と言いたいところですが、学生の中には「プライベートなことなので人前では言えません。言ったら母に叱られます」と頑なに拒否をする人もいました。性やからだに関しては、これまでの学校や社会生活の中で受けた否定と禁止の指導を真面目に守ろうとしている姿ですから、頭から否定することはできません。「誤学習」と「未学習」からどう学び直しをしていくのか、それが今の日本の性教育の

大きな課題です。性教協メンバーの日暮かをるさんが月一回「性教育」をしています。昨年度は「自分は何の辺り？」ここからだの年齢「多様性」触れ合いとオキシトシン「自分史つくりと発表」が主なテーマでした。特に「自分史」は一人一人が自分の人生について丁寧にインタビューしてもらい、それを巻物に書いて発表をしました。七か月かけた取り組みでした。長い時間の中で率直に自分を語り、仲間と共に感してもらえぬ心地よさを味わいと味わえました。今年度は「家族の命のつながり」「人類の歴史」「障がいについて」「ピンチ・モヤモヤ・ズ・かいけつカードつくり」でした。

日暮さんは、「何を言ってもドンと受け止めてもらえる」という安心感があるので、学生たちはついつい本音トークをしてしまします。津久井やまゆり園事件やトリアージ、権利条約のことを語っていても「と考えるべき」という結論を決して押し付けられないので、学生たちが自由に意見を出し合えます。